

南海ブーゲンビル島で終戦前の自決

粕屋郡粕屋町 井上 十三郎

昭和19年(1944)10月下旬、豪州軍は米軍と替り戦場の拡大、攻勢の方針をとり、20年1月末に島の南西部トコに突如上陸、攻撃して来た。ここにわが軍は北方モシゲタと西南海岸の両方向から挟撃される不利な態勢となった。食糧事情もようやく好転してきた矢先だったが、今度こそジャングル肉迫戦で豪軍を撃退し後方ラバウルの防衛、さらには日本への直接攻勢阻止のために空軍援助のない貧弱な戦力ではあるが悲愴な決意に燃えて戦闘配置につき、これを「マル復作戦」と称した。

わが工兵部隊はハタイのジャングル内に集結し、柴原連隊長から訓示があった。「多くの戦友を亡くしわが隊もいよいよ最後のご奉公をするときが来た。ここに、故山崎中隊長以下多くの戦友の霊を慰めるためにも全員決死の覚悟でその使命を完遂し、日本防衛の人柱となろう…」と。

全般の戦局は最前線のわが空海陸軍の反撃もその甲斐なく、米軍は既にマッカーサー將軍、ニミッツ提督統括のもとにフィリピン方面に進攻の鋒先を向けていた。連隊長より早速第一回挺身攻撃の命令が私(井上)と同期戦友、山地中尉に下された。この間にもうっ蒼としたジャングルの上空を爆音砲撃音が遠く近く響きわたっていた。

小隊にかえりバララ付近特攻の主旨を伝え、中森曹長以下10名を指名し、器材を整備させて私は山地の幕舎を訪ねた。これが最後の別れとなるかもしれないと直感したからだった。山地は「俺がもし死んだら熊本の母を訪ね、許婚者(フィアンセ)のM子さんにも会い、よろしく伝えてくれ。もっと日本にいて親孝行をしたかったとな…」と。二人は家のことや思い出等次々と話し合ったが、私も「おまえが死んで俺がいきるなんて考えられん。万一生きても敵軍から銃殺されるだろうからな」と。別れる前に彼は、「遺言は当番に托してある。お互いに成功を祈る」としっかり私の手を握った。私も感動して幕舎に帰ると、お別れの一文をしたためて、へたな辞世の句を道元禅師のことばをお借りして書いた。「白人の弾下に屍(かばね)曝らすより不惜身命(ふしゃくしんみょう)突入をと念ず」と。

わが挺身攻撃は暗夜に敵の後方にいて橋梁とトラックの破壊、並びに通信線の切断を苦勞の末に遂行し帰隊できたが、山地隊はワニの棲むプリアカ川を下って敵陣内に潜入したとき、一人の兵が鉄条網にひっかかって発見され、闇の中で激しく射ち合いや手榴弾戦をしたが、彼我次々とたおれ、彼も身に凶弾を受けるも屈せず、動けなくなると自爆したとのことだった。一人の重傷兵の報告という。このことを聞いたとたん私は呆然自失、急に力が抜けて虚脱状態となり、幕舎に帰ると疲れも出て深い眠りにおちていった。

豪軍は戦車を先頭に大部隊がA道添いに東へ進出して来た。わが軍はゲリラ的後方攪乱戦を敢行し、大きな打撃を与えた。わが隊も菅沢兵長、松下伍長、戸軍曹等の戦死や負傷者を出し

つつも体の続く限り気力を奮い立たせ、空腹と疲労、負傷や疫病等を克服して協力一致頑張った。

しかし、命令で久々に後方にさがり直接敵と接することがなくなると、急に前身に虚脱感が襲い、活発な言動が喪失するのをどうすることもできなかった。他の戦友も皆同じようだったと思われるが、心の緩みのせいかマラリヤに罹ってしまった。全身が寒気と倦怠感で、遂に壕内にて呻吟（しんぎん）する情けない身となり、やがて体温も上昇し朦朧となっていった。頭の中に幻想的にタロキナ戦で「死んでたまるか」と叫んで戦死していった矢黒軍曹や、「お母さんや恋人によろしく」と死地に向かった山地中尉等上官や部下の方々の死など、次々と眼前に彷彿する。熱が下がっても戦友達の死が悉く自分の責任であるように己れをさいなむ。

戦局は、4月に入ると硫黄島も激戦の末占領され、沖縄本島も日本軍人のみでなく一般民間の女や子供まで次々と米軍に蹂躪されているとの情報で、今や戦争の勝敗は明らかであり、祖国日本に凱旋する一縷の希望は完全に打ち砕かれてしまった。

日本を離れること4000Km、上陸以来滅私奉公の強い信念で祖国愛に燃え、東亜共栄のためと信じて様々な苦難を乗り越えて戦ってきた自分達のこれから先を考えると、言い知れぬ哀れさを感じずにはおられない。痩せ細り、思考能力も減衰した私は、ものごとを悲観的に考えるようになっていた。

故郷の駅頭で村の助役さんが私の出征にあたり大勢の前で「国のためにしっかり戦って下さい。銃後のことは心配せずに征って下さい」と激励され多くの人々の万才の声や旗の波に送られて故郷を後にしたあの感激！！。今は亡き父母、ほか親しい人々、懐かしい山や川、楽しかった若い頃の出来事など次から次と走馬灯のように去来する。

これから先、この衰えた体でどのように活動すべきか、むしろこの苦しい中を懸命に生きようと頑張っている他の戦友達に大きな迷惑をかけるのは必然的であろうと、とつおいつ思い悩むのであった。かねて部下には「死急ぎはするな」と激励して来たのだが、これ以上皆に迷惑をかけては相すまないという考えが支配するようになり、頭はぼんやりし、死場所を思いめぐみ、25年の人生に決別の決意ができた。朝まだき前方の守備隊が敵の急襲を受けて激しい射ち合いが始まった。私は殆んど無意識で立ち上ると、前のくさむらに正座し26年式拳銃を下顎に当てた。冷たい銃口を感じたとき、力一杯ひきがねを引いた。バーンと音が耳をつんざく。目の前がまっ暗くなり、熱いものが鼻と口からとび出す…。以後は意識を失って何もわからなかった。近くの友軍が襲撃してきた豪軍を撃退してくれて私は救出された。銃弾は脳を砕かずに下顎から舌、上顎から眉間を貫通し奇跡的に一命をとり止めたのであった。野戦病院でもうわごとは「母さん、母さん」と小さく泣き叫んでいたという。

“生きる”ということは人間の絶対的本能である。生きるからには生涯を最も有意義に過ごすべきだ。最後の最後まで希望を捨てることなく生きる努力をせねばならないとしみじみ思う。同じ病床には、私同様に傷ついた戦友達が心身の苦痛と空腹に耐え忍んでいた。眉間の化膿も徐々に軽くなっていたが、絶えず上を向いているのはきつかった。T中尉やY少尉等とは胸襟を

開いて人生やこれからの戦闘の話などをして決意を新たにし、また救って下さった戦友達に心からお詫びをすると共に、再起奉公、最後まで戦う決意が傷の好転と共に燃え上がってくるのであった。戦争は勝敗いずれの国家にも国民にも悲劇をもたらす。憎しみ殺し合いはお互い自滅の道を進む。平和こそ尊く大切であるとしみじみ感じるのだった。

入院もおおよそ1カ月で敵の近迫により退院することになり、再び厳しい戦闘の渦中に入らねばならなかった。工兵第3中隊に苦勞をして帰隊した。7月3日には歩兵13連隊に配属され、歩兵6、工兵6の13名で夜半にシンガキロ陣地内に潜入し、大型幕舎1、中型戦車1を爆破炎上し、次々と体の続く限り必死で戦った。

昭和20年8月15日の終戦を3日過ぎて、敵機の翼に「日本降伏」の文字を認めた。

昭和21年2月14日負傷と栄養失調の身で祖国の土を再び踏むことができた。